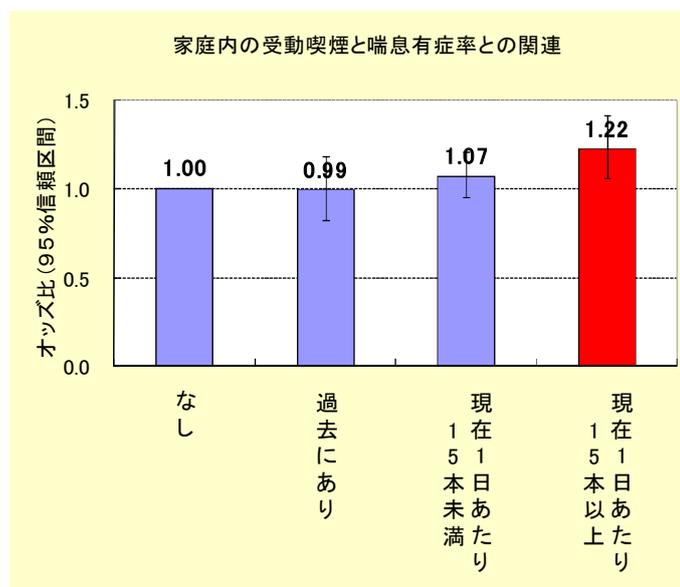


受動喫煙とアレルギー疾患との関連

背景：受動喫煙が小児アレルギー疾患のリスク要因であるかどうかの結論は未だ得られておりません。日本の過去 2 編の横断研究の結果では、その一つで受動喫煙とアレルギー性鼻炎との正の関連が報告されていますが、もう一つの研究では家庭内喫煙とアレルギー疾患との間に関連はありませんでした。

方法：琉球小児健康調査の参加者のうち、解析に用いた要因のデータ欠損のない 23,044 名を対象としました。ISAAC の定義に従い、過去 1 年に喘鳴、喘息、アトピー性皮膚炎、アレルギー性鼻結膜炎の症状のある場合、各アレルギー疾患有りとししました。年齢、性別、居住市、兄弟数、両親の喘息、アトピー性皮膚炎またはアレルギー性鼻炎の既往歴、両親の教育歴を交絡因子として補正しました。

結果：家庭内喫煙のない群を基準として、現在 1 日 15 本以上の家庭内喫煙のある群の喘鳴及び喘息のオッズ比はそれぞれ 1.17 と 1.22 で、統計学的に有意でありました。受動喫煙の蓄積曝露量を評価するため、家庭内喫煙のパック年を算出したところ、家庭内非喫煙に比較して、7 パック年以上では、喘鳴及び喘息の有症



率は有意に高まり、その傾向性 P 値も統計学的に有意でありました。年齢階層別の解析では、11 歳以上の群よりも 10 歳以下の群でより強い正の関連が認められました。両親のアレルギー既往別の解析では、どちらかの両親にアレルギー既往のある群でより強い正の関連が認められました。受動喫煙とアトピー性皮膚炎またはアレルギー性鼻結膜炎との間に関連はありませんでした。

結論：あるレベル以上の受動喫煙が子供の喘鳴と喘息の高い有症率と関連があるのかもしれない。

出典：Tanaka K, Miyake Y, Arakawa M, Sasaki S, Ohya Y. Prevalence of asthma and wheeze in relation to passive smoking in Japanese children. *Ann Epidemiol.* 2007; 17: 1004-1010.